

# 小説『バトルランナー』再読ーベン・リチャーズのヒーロー像

宮内 妃奈

(はじめに)

2025 年、持つ者（特権階級）と持たざる者（下層階級）が明確に区別され、情報が国家の統制下にある全体主義的アメリカ。政治的、構造的暴力下で徹底的に機会を奪われた下層階級は、鼠や野良猫がゴミをあさり病気が蔓延する不衛生で荒廃した環境に生き、法律によって一家に一台置くことが定められているテレビで国家放送番組 Free-Vee を見ている。Free-Vee が流すのは、多額の報奨金が与えられる「デスゲーム」のリアリティショーで、一攫千金を狙う男たちが参加しては消えていく様に人々は興じている。いわゆるエンターテインメントという名の元で行われる国家による公開処刑と言えるものだが、この狂気的世界は、1982 年出版の *The Running Man*（邦題『バトルランナー』）<sup>1</sup> に描かれる 2025 年のアメリカの姿だ。

小説『バトルランナー』は、Stephen King が Richard Bachman というペンネームで発表したバックマンシリーズの 4 作目に当たる。キングによるとそれは、*Carrie* (1974) 発表以前の 1971 年に最短 3 日で書き上げられ、ほぼ変更されずに出版されたものであるらしい。<sup>2</sup> 作品が扱うテーマは、「政治統制の手段として構造的、身体的暴力を扱う人間」（Foy & Dale, 161）であり、キング作品のシンボルである怪物やゾンビなどは登場しない。ベストセラーホラー作家として地位を確立していたキングが、敢えて超常現象を封印しバックマンとして新たな世界の創造に挑戦したものだ。<sup>3</sup> 今作品の知名度については、1985 年にバックマンの正体が明らかになり、*The Running Man* を含めた 4 作品のアンソロジー、*The Bachman Books* がベストセラー入りしたものの高いとは言えず、むしろ「映画」（1987 年）の方

が知られているのではないだろうか。映画は、80年代にコナンシリーズや *The Terminator* (邦題『ターミネーター』)(1984) で人気が高まっていた Arnold Schwarzenegger が主演を務め話題となった。それは、小説とは異なり、シュワルツェネッガーの肉体美と体格を活かしたアクション活劇として楽しむことができる。主人公 Ben Richards の「強さ」が前面に押し出され、最新鋭の武器を装備したハンターたちを次々に打ち負かすバトルシーンが見どころだ。

1987年映画版『バトルランナー』のベン・リチャーズは、国家警察の一員であり、弱い者を守り、「丸腰の市民に銃は向けない」という正義感を持った人物だ。彼が「ランニングマン」に出演することになるのは、本人の意志ではなくディレクターによって視聴率を上げる道具として利用されたためである。「自分は政治に興味はない。生き残ればそれでいい。」という言葉が表すように<sup>4</sup>、彼は社会への不満や怒り、政治的理想に縛られてはいない。ハイテク武器ガジェットに身を包み襲い掛かってくる敵のハンターたちと「素手」で戦い、仲間を助け、そしてハンターにすら慈悲をかけるという彼の「超人的強さ」と「正義感」が強調されている。映画版ベン・リチャーズは、いわゆる、肉体的・精神的強さを持ち仲間を大事にするアメリカン・コミックスのスーパーヒーローだ。

しかし、小説のベン・リチャーズはシュワルツェネッガーが演じるようなスーパーヒーローでは決してない。彼は全体主義的世界で仕事も金もなく、妻に頼って生活する「役立たず」だ。彼は打つ手に困りどうすることもできず、報奨金を得るためにデスゲームに身を投じるのである。

この『バトルランナー』の再映画化が2021年に発表された。小説が設定する時代と同じ2025年に公開される予定である。*The Guardian* (Web版)によれば、2025年版映画のディレクター兼スクリーンライターである Edgar Wright は、彼が若い頃に見た『バトルランナー』が原作とは全く違ったことに衝撃を受け、今作は、小説に近い形で映画化することに意欲を示しているという。1987年版と異なり「小説世界に忠実な」映画が、業界大手のパラマウント・ピクチャーズによって提供されるとなれば、キングファン

のみならず市場も、その動向を注視していることだろう。前作の1980年代の『バトルランナー』と比べ制作技術が飛躍的に進化した現代において、映像がいかなるものになるのか、また背景となる「近未来の2025年」がいかに描かれるのかも含めて、再映像化への期待は大きい。

本論は、再映画化を前に、小説に描かれているベン・リチャーズの物語を読み直し、そのヒーロー像に迫るものである。Kimberly Beal がリチャーズについて「バックマン作品の中では最もヒーローに近い存在」<sup>5</sup>と述べる時、いわゆる「スーパーヒーロー」の意味が想定されているだろう。しかし、ヒーローには様々な型、パターンがある。*The Writer's Journey* の著者 Christopher Vogler は、ヒーローの語源は「自己犠牲」の精神を持ち「人を守り、人のために尽くす者」にあると言い、分類しているが、それによればベン・リチャーズは「アンチ・ヒーロー」の部類に入る。<sup>6</sup>このリチャーズのヒーロー像について、Joseph Campbell が説く Monomyth（単一神話）の型、①出発、②イニシエーション・冒険、③帰還の円環構造の中で<sup>7</sup>、超現実的な援助や出会いによって試練を乗り越えて成長し「神格化」というヒーローズ・ジャーニーと、それを基にアメリカハリウッド界に影響を与えたクリストファー・ヴォグラーの分析を用い考察することが本論の目的である。ベン・リチャーズの物語における「ヒーロー」の旅の構造であるが、例えば、彼は娘の治療費を稼ぐために家を飛び出して「ランニングマン」に生まれ変わる。「ランニングマン」として下層階級の枠に囚われず、リアリティ（現実世界）からバーチャル（テレビの世界）へと越境することで、それまで知らなかった世界を知り、人々の力を借りて試練を乗り越え、個人の枠を超えた社会的存在として、国の支配者と決着をつけ（るため）、故郷に戻ってくる、と捉える時、円環構造が見えてくるのではないか。実際、キングがキャンベルの *The Hero with a Thousand Faces* に精通していたことは知られており<sup>8</sup>、『バトルランナー』にその類推を見出すことは、全く的外れな試みでもないだろう。まずは、ベン・リチャーズの旅における個々の現象をヒーローズ・ジャーニーの型から考察し、彼が越境した二つの世界をヒントにヒーローの役割を明らかにする。

## 1. 小説『バトルランナー』のベン・リチャーズ：「旅」の概要

バックマンシリーズの作品群は、Tony Magistrale が明らかにしているように、登場人物の心理描写や人物造形に深みはないが、プロットの構成において一定の評価を得ている。Douglas Winter は、キング自身も “[I]t’s nothing but story.” と認めていたことを明かしたうえで、『バトルランナー』は中でも「彼のお気に入りの作品の一つ」だったという。<sup>9</sup> まずは、プロットにおけるヒーローズ・ジャーニーの型を追認しながら、リチャーズの旅についてまとめてみたい。

国家の情報を統制、監視するテレビ局 Games Network のビルがそびえる Harding の町は、運河によって持つ者と持たざる者の居住空間が分けられている。ベン・リチャーズは、家族のためにネットワーク社がプロデュースするサバイバル・リアリティショー「ランニングマン」のオーディションに参加するため、低所得者が住む南部地域から運河を渡る。（“The Call to Adventure”：出発）「ランニングマン」などのデスゲームを企画し無料で放送する Free-Vee の主旨は、多数の応募者の中から知能が高く、国家を脅かす危険分子を抽出して始末することだ。リチャーズは、高度な IQ と身長 6.2 フィートという恵まれた体格でオーディションをクリアし、また彼が示した反逆的精神、猥雑な思考、自立心の強さによって、最も過激なゲーム「ランニングマン」に選ばれるのだった。（“The Crossing of the First Threshold”<sup>10</sup>：冒険・第一関門突破）

ゲームが始まると、ランニングマンは町に放たれ、プロの殺人ハンターや警察、情報提供者として賞金を狙う民衆の全てから逃れなければならない。もし彼が 30 日間生き延びられれば莫大な賞金（10 億ドル）が与えられ、さらにゲーム開始から 1 時間生存し続ける毎に 100 ドルが家族のもとに送金されることになっていた。そのランニングマンに課せられる制約はただ一つ、1 日に 2 回、自分の映像テープをネットワーク社に送り、生存の証拠を残すことである。彼はハーディングからニューヨーク、ボストン、そしてポートランドへと逃走し、その過程で様々な人に力を借りながら試練に立ち向か

う。（“Tests, Allies, Enemies”：試練・仲間・敵対者）

リチャーズに最も影響を与えたのは、ボストンで出会った黒人兄弟、Stacey と Bradley であった。彼らの協力でリチャーズは国の陰謀を知ると同時にボストンからポートランドへ逃走する。そこでリチャーズは、ブラッドリーの仲間 Elton Parrakis とその母の庇護を受ける。しかしながらエルトンの母の裏切りによってリチャーズは警察に追跡されて大けがを負い、彼を助けようとしたエルトンは命を落とすことになる。怪我で逃走の限界を感じたりチャーズは上流階級の女性 Amelia Williams が運転する車を奪い、彼女を人質として、地元テレビ局の中継の中、ハンター長である McCone との対決を試みる。交渉におけるリチャーズの切り札は、爆弾を持っているという嘘（ハッタリ）とその嘘を知るアメリアの供述であった。マッコーンはリチャーズの爆弾所持が「ブラフ」であると疑いながらもアメリアの供述拒否によってリチャーズを射殺する行為に踏み込めない。リチャーズは最終的にマッコーンとアメリアを引き連れて、「家族のもとに戻る」ため飛行機ジャックを決行する。そして、最大の敵であるネットワーク社の長、Dan Killian を交渉の場に引きずり出すのだった。（“Atonement with the Father”：最大の試練）ハーディングにあるネットワークビルの最上階にオフィスを構え、ボタン一つでリチャーズの飛行機を撃ち落とすことができるキリアンだが、彼が仕掛けたのはリチャーズを仲間に入れるという提案だった。彼の能力を買ってハンター長にするという。リチャーズはそれをいったんは受け入れ、最終目的地をキリアンの待つビルに設定する。（Return：帰還）

このようにリチャーズの物語は、出発、冒険、帰還の大きな円環の中でヒーローズ・ジャーニーを構成する諸要素を含んでいる。次章以降では、リチャーズの旅を最初の越境、試練の道、帰還の段階に分けて、彼が関わる二つの世界について考察する。果たしてリチャーズはもと居た世界にヒーローとしていかなる「恩恵」をもたらすのか。

## 2. 越境（出発から境界突破の過程）

ベン・リチャーズの物語には、彼の命が尽きるカウント 100 の時限的な語りのレベルと彼の最終目的地「100 階」までの空間的上昇を暗示する二つの層がある。オーディションは選考を突破するごとに会場が上昇していくが、最終的にリチャーズが「ランニングマン」に指名され、エレベーターで地上に降りるよう指示された際、“What if I could go up ?（中略）Who could I kill up there? Who could I kill if I went right to the top?”（57）とダン・キリアンに向かって放つ言葉は、最後に 100 階へ「飛び込む」結末、カウントゼロの伏線になっている。

リチャーズが「出発」し「ランニングマン」になるまでの過程には、地理的で経済的な領域境界とリアリティとバーチャルという次元的境界の越境が関わっている。彼は、いわゆる既知から未知の世界への横断を経験しなくてはならない。まず、オーディションのためにリチャーズが越えるのは、「運河」である。<sup>11</sup>これは単なる地理上の境界であるだけでなく、階級、経済状況、公衆衛生、安全性のレベルにおいて政治的に引かれているラインであり、特に南部の劣悪地域からは許可なく超えることはできない。この「境界を守る守護神」が、ゲームズ・ネットワークの組織であり、超高層ビルとして立ちあがる。

リチャーズが生活する南部の町は、彼の目を通して以下のように描き出されている。

A rat trotted lazily, lousily, across the cracked and blistered cement of the street. ...The cops rarely ventured south of the Canal anymore. Co-Op City stood in a radiating rat warren of parking lots, deserted shops, Urban Centers, and paved playgrounds. The cycle gangs were the law here, and all those newsie items about the intrepid Block Police of South City were nothing but a pile of warm crap. The streets were ghostly, silent. (4-5)

建物などのインフラは整備されておらず、店も荒れ果てネズミが巢食っている。警察は機能せず、ギャングが幅を利かせ、町は静まり返っている。壁には卑猥で暴力的な落書きが残されたままで、ごみが散乱したままの「戦場」(“battlefield,” 6) とも表現される町は、荒廃と危険、腐敗に満ちた無法地帯である。

そして、それとは対照的に運河の先には別世界が広がっている。

He could see the skyscrapers rising into the clouds now, high and clean. The highest of all was the Network Games Building, one hundred stories, the top half buried in cloud and smog cover. He fixed his eyes on it and walked another mile. Now the more expensive movie houses, ... A city cop on every corner. The People's Fountain Park: Admission 75¢. Well-dressed mothers watching their children as they frolicked on the astroturf behind chain-link fencing. A cop on either side of the gate. (6)

そこは多くの警察官によって秩序と安全が守られ、経済的に裕福な人々のための場所であり、高級な映画館、人工芝で整備された有料の公園などがある。この地理的境界を越えることができるのは、「守護神」であるネットワーク社のオーディション（試験）を受け、パスした者だけに与えられる Free-Vee 出演の権利だ。

リチャーズは、ネットワーク社の入り口に1キロ以上並んだ他の人々と共に、ビルの1階から10階に用意された試験に挑む。それは、「生まれ変わり」という名の旧世界の放棄、脱個性化、無名化、そして商品化の過程である。リチャーズはビルの中で服を脱がされ、「ベン・リチャーズ」という個人と繋がるもの、家族や持ち物との決別を余儀なくされる。

He had an empty wallet with a few pictures of Sheila and Cathy, a receipt for a shoe sole he had had replaced at the local cobbler's six

months ago, a keyring with no keys on it except for the doorkey, a baby sock that he did not remember putting in there, ...

He was wearing tattered skivvies because Sheila was too stubborn to let him go without, ... Soon they all stood stripped and anonymous, ... (Underline added, 14)

彼が「名無し」と表現するように、まるで「ベルトコンベアー」(“an assembly line,” 13) に乗せられた商品であるかのように機械的に流され、番号で呼ばれ、他の男たちと同じ既製服に替えさせられる。リチャーズは “as if he had lost his face” (20) のように感じ、旧世界から完全に切り離される。そして、「ランニングマン」という新しい「顔」に挿げ替えられるのだった。それは動物のような下等で凶暴なものであり、映像化されて、皆が追い求める「もの」となる。

It had been retouched, Richards thought, to make his eyes deeper, his forehead a little lower, his cheeks more shadowed. His mouth had been given a jeering, curled expression by some technico's airbrush. All in all, the Richards on the monitor was terrifying – the angel of urban death, brutal, not very bright, but possessed of a certain primitive animal cunning. The uptown apartment dweller's boogeyman. (53)

テレビで紹介されたリチャーズは「ブギーマン」としてフィクション化され、もはやサウス・カナル地域のベン・リチャーズという「人間」とは別の存在である。彼は、目撃したらすぐに通報、もしくは、殺害すべき「ランニングマン」という「公的なヴィラン」に仕立て上げられたのだった。MC は聴衆に向かって言う。

“Tomorrow at noon, the hunt begins. *Remember his face!* It may be next to you... *Will you report him?*”



“YESS!!!” They screamed. (55)

こうして「ランニングマン」のラベルがついたリチャーズは、ただ一人、「産道」を象徴するかのような、白い廊下を通りエレベーターでビルの階下へと降りていく。

このリチャーズの「顔を失う」脱個性化のオーディションの過程は、しながら、読者にとっては、それとは対照的な意味を持つものとなる。出発時点で一面的であったベン・リチャーズの情報は更新され、読者はリチャーズの中に「ヴィラン」とは真逆の、極めて人間的な家族愛や人情、そして知性を発見するからだ。

カウント 100 のリチャーズの出発は、妻 Sheila の三人称の視点から語られる。従って、リチャーズの直接の心理描写に触れることができず、読者の「リチャーズ像」は巧妙に制限されていると言っていいだろう。シェイラによると、ベンは「時代についていけない遺物であり、恥であり危険分子」(3)であり、Free-vee を数週間、内容に集中するでもなく、空虚に見つめるだけの男である。

She looked at her husband. He was seated at the table, staring up at the Free-Vee with steady, vacant concentration. He had been watching it for weeks now. (1)

Free-Vee に出ることは死を意味し、彼らの思う壺だと、自らの置かれた現実を客観的に冷静に理解しているシェイラに対して、夫ベンは「催眠にかかったよう」(“hypnotically,” 2)に一攫千金を求める「短絡的」で「向こう見ず」な様相が色濃く表れている。彼は「君はもう体を売らないでくれ」(2)と繰り返し、家族のために行くしかないと説得するが、後に残されるシェイラには、その言動は家族の現実を理解しない、無益なものとして響いている。

しかし、このベン・リチャーズ像は、家を飛び出した後、彼自身を主体とした三人称の語りによって変化していく。特に空虚に響いていたリチャーズ

の「家族愛」だが、オーディション会場でのやり取りで、彼の真意が明らかになる。まずは、身体検査を受けた医者に Free-Vee に出る理由は「自殺目的」なのかと問われ、リチャーズは、「まるで形にならない自分の感情を言葉にさせられるかのように」（27）次のように述べる。

“My little girl’s sick. She needs a doctor. Medicine, Hospital care. ...

“I haven’t had work for a long time. I want to work again, even if it’s only being the sucker-man in a loaded game. I want to work and support my family. I have pride. Do you have pride, Doctor?” (27)

リチャーズを動かしているものは、娘の病気の治療代を稼ぐということ、そして働くことによって家族を支えたいという切実な思い、信念であり、単なる贅沢のための金目当てではない。このリチャーズの揺るぎない「プライド」は、警備員の心をも動かすものとなる。それはオーディション会場の5階に勤務する Charlie Grady とのやり取りだ。リチャーズは、病気の娘の世話をしている妻に電話をかけるため、お金を貸してほしいと頼むのだが、グレイディは「よく聞く（金を借りるためのでっち上げ）話だ」（28）とリチャーズの頼みを一蹴する。しかし、次の言葉がグレイディを動かすのだった。

“Aren’t you married yourself? Didn’t you ever find yourself strapped and have to borrow, even if it tasted like shit in your mouth?” (29)

ここにはやはり「家族のため」なら泥水を飲んでも構わないという強いプライド（面子に拘らない真のプライド）が表れている。この言葉を聞き、警備員はお金を「恵む」。

このエピソードは、しかしながら、これで終わらない。リチャーズはオーディション後に自分が獲得した賞金からグレイディに電話代を返金し、さらにその行為に対してグレイディも「ありがとう」のメッセージで応えるのだ。このやり取りにリチャーズは「自分が欲しかったもの」（45）だと心癒され

るのだが、これは動物でも殺人鬼でもない同じ「人間」として扱われ、当たり前前に礼を尽くされたことへの感謝の気持ちの表れであると言える。このようにリチャーズの行為、言動によって、彼の持つ礼儀（“sincerity”）、倫理観（“justice”）が明らかになっている。

読者がベン・リチャーズの人間性に見出す最後の特徴は、彼の妻への「純潔」（“chastity”）と知性である。彼を取り巻く暴力に満ちた世界とスラングを多用した猥雑な言葉使いはハードボイルド的男性的世界観を彷彿させる。会場にいる女性に対する彼の猥褻な言葉や体形への言及は、女性を男性の性的欲求を満たす道具としてみなす視線に類し、ヴィラン性、暴力性に結び付きやすい。しかしながらリチャーズは、最終オーディションで「ランニングマン」に選ばれた「褒美」としてキリアンから女性を提供されるのだが、「俺は既婚者だ」（40）と言って断っている。代わりに彼が要求したのは、数冊の本、であった。マジストレールは、キングが描く世界について、しばしば道義的に正しい選択を阻み、個人の考えを支配し、個人の良心を破壊してしまうような要求をする悪が蔓延し、そこで個人のヒーローは忍耐力を試されるという。キングのヒーローはそれを「拒絶」することによって悪を乗り越える力を示す、と述べているが、まさにリチャーズは確固たる道徳心を持つキング的ヒーローの一人であるだろう。<sup>12</sup>彼の「礼儀」「正義」「純潔」はまた、アメリカ建国の父 Benjamin Franklin が説く徳に似た性質を兼ね備えているとも言え「アメリカ的」であるかもしれない。

このように、ネットワーク社によって作り出されたヴィランとしてのベン・リチャーズと読者に明らかになる生身のリチャーズ、そしてそれを取り巻く二極の世界が、物語を動かす両極となる。読者はその二つの世界の間で戦うリチャーズに、彼のヒーローとしての役割を見る。

### 3. 試練の道

「ランニングマン」としていわゆる表のリアリティの世界から姿を消し、一種の「バーチャル」な世界に移動した彼は、キャンベルが「流動的で曖昧

模糊とし確固たる形の無い夢のような場所で、ヒーローは命を懸けて試練の連続に立ち向かう」(Campbell, 81)と表すように、命懸けで試練の道を辿ることになる。ハーディングから北へ北へと敵の目を欺き移動するのだが、次第にリチャーズは追い込まれ逃げ場を失っていく。本章では、リチャーズの「冒険」において鍵を握る3つの出来事に焦点をあてる。それはステシーとブラッドリー兄弟との出会い、ヴァージニア・パラキスの裏切りとアメリカ・ウィリアムズの協力、番組のディレクターのダン・キリアンとの対決である。これらはクリストファー・ヴォグラーによるキャラクターの元型によれば、それぞれ「使者と老賢者(メンター)」、「変身する者」、「影」に値する。

リチャーズは、ニューヨークから移動し身を潜めたボストンのYMCAがハンターによって包囲されたとわかると、それを爆破し、追手から逃れるために地下に降りて下水道を抜け<sup>13</sup>、その先で、黒人少年ステシー(7歳)に会う。彼は悪魔よりも嫌いな存在は「警察」(91)だと言い放つ、リチャーズと同じ下層階級の人間で、リチャーズに兄ブラッドリーを引き合わせ、彼の代わりにゲームズ社宛のテープを投函する。ステシーは、いわば、リチャーズに必要なものを手配してくれる「使者」(Vogler, 75)として大きな役割を果たしている。ステシーの兄ブラッドリーは、父不在の家族の長として、5歳で肺がんを苦しむ妹キャシーの世話をしながら、家族を支える青年である。彼は「発明家」(Vogler, 42)であり、リチャーズに知識を授ける「メンター」となる。ブラッドリーがリチャーズに教授するのは、政府が大気汚染の事実を情報統制によって隠していること、また、恵まれた人のみが除染フィルターで守られており、自分たちのような下層階級はキャシーのような患者で溢れていることである。もちろん、自分の置かれた状況に満足してはいなかったリチャーズだが、抗議活動のような社会運動は「大学生のような時間と金があるやつら」(116)がすることだと直視するのを避け、自らが追い込まれた状況の真相に目を向けることはなかった。しかし、ブラッドリーが真実を求めて図書館で情報を集め、さらには自分たちで大気汚染を測定する機械や家族のためのフィルターを作った事実を知り、リチャーズは同じ下層階級に属す人間として初めて不平等な社会への「怒り」を感じる。もしチャ

ンスがあれば「全てをぶちまけて」(101) 人々に知らせたいというブラッドリーの言葉を受け、リチャーズはゲームズ社宛のテープの内容を変更する。

「ランニングマン」として最初にリチャーズがテープに吹き込んだ内容は以下の通りであった。

“Peekaboo, ... You can't see it, but I'm laughing at you shiteaters.” (65)

彼が語る相手は、自分以外の全ての人々であり、皆が敵である。社会を分ける二つの境界は意識されることなく発せられていた。しかし、これはブラッドリーとの出会いによって変化する。

“All of you watching this,”...

“Not the technicos, not the people in the penthouses... You people in the Developments and the ghettos and the cheap highrises. You people in the cycle gangs. You people without jobs. You kids getting busted for dope you don't have and crimes you didn't commit because the Network wants to make sure you aren't meeting together and talking together. I want to tell you about a monstrous conspiracy to deprive you of the very breath in y—” (102-103)

すなわち、語る相手を変化して、リチャーズの中で二つの世界が明確に切り分けられ、自分が「戦うべき」相手が認識されたことが示されている。さらにリチャーズは、人々に図書館に行つて真実を見極めるように本の情報を伝え、国が大気汚染を隠していることを訴える内容を録画して送り続けるのだった。もちろん、オンエアでは、音声が途切れ、映像に映るリチャーズの口とは全く異なる「攻撃的な」言葉に吹き替えられるなど、編集の妨害に遭うのだが、作られた悪役のヴィランでしかなかった「ランニングマン」は、ネットワーク社が完全に制御できない、下層階級の人々と共にある「ランニングマン」として生まれ変わったと言えるだろう。この変化をリチャーズも

また認識している。

Richards reflected that an unwilling change had come over him during his five days on the run. Bradley had done it – Bradley and the little girl. There was no longer just himself, a lone man fighting for his family, bound to be cut down. Now there were all of them out there, strangling on their own respiration – his family included. (Underline added, 116)

自分は孤独ではなく、人々と共にあり家族も含めた彼らのために戦っているのだと。

ベン・リチャーズに知恵を授ける存在が「経験」のある老賢者ではなく、「無垢」を象徴する子供や青年であることの意味は大きい。キングの作品には子供がたびたび登場し、その「純粹さ」「偏見に囚われない自由な発想、行動力」が作品の主題となって表れている。また、アメリカ文学の歴史においても、「経験」対「無垢」の二項対立におけるイノセンスの選択が「アメリカ性」の特徴として語り尽くされてきた。このリチャーズとブラッドリー兄弟の出逢いは、すなわちキング的でもあり、「アメリカ的」でもあるということだ。

次にリチャーズの「冒険」に影響を与える「変身する者」の元型を持つ二人の女性について考察してみたい。ヴォグラーが説明するように、「変身する者」はヒーローとは異なる性別である場合が多く、頻繁に「変化する」ため敵なのか味方なのか捉えどころがない。ヴァージニア・パラキスもアメリカ・ウィリアムズもリチャーズにとって曖昧な存在として彼の命の鍵を握る。パラキス夫人は、“it looked as if it had taken hundreds of invisible hooks and jabs and uppercuts in a no-holds-barred brawl with time itself” (128) と表現されているように、下層の虐げられた階級の出身で、息子のエルトンに唯一の生きがいとする母である。彼女は、もともとエルトンがブラッドリーと共に政府に対して地下活動を行っていることをよく思っていない。そのブラッドリーの要請でリチャーズの保護を頼まれ、彼女は「息子

の正義：リチャーズの保護」と「息子の命」の間で逡巡する。最終的に彼女は、息子の命を守るためにリチャーズの「敵対者に変身」し警察に通報するのだった。一方、上流階級に属し、リチャーズによって車をハイジャックされ人質となったアメリカは、「リチャーズの命：自分が知らなかった社会正義」と「警察：不平等な社会の上に成り立つ正義」の狭間に立たされる。最終的にアメリカはリチャーズの「仲間 (Vogler, 138) に変身」し彼の命を救うのだが、特に上流階級のアメリカの歩み寄りにはリチャーズの「旅」に大きな影響を与えるものとなる。

なぜアメリカは最終的にリチャーズの爆弾がハッタリであることを暴露せず、彼の旅を終わらせなかったのか。嘘を突き通した理由を尋ねたりチャーズにアメリカは次のように答えている。

“Don’t know. You made me feel like a murderer. Wife. And you seemed so”... “pitiful.” (203)

「哀れな気がして」という言葉は、リチャーズを「バーチャル」で「加工された」存在ではなく、同情できる存在として捉えたことを表すものである。

リチャーズとの出会いはアメリカにとっても、彼女が知らなかった世界に対する「イニシエーション」の過程でもあった。彼女は、彼が住む世界と自己の置かれた世界に違いがあることを知らず、リチャーズになぜ働かずに金儲けのために番組に出て人を殺すのかと問う。それに対してリチャーズは、社会の不平等をアメリカに突き付けるのだった。

“I’ll tell you. It’s disgusting to get blackballed because you don’t want to work in a General Atomics job that’s going to make you sterile. It’s disgusting to sit home and watch your wife earning the grocery money on her back. It’s disgusting to know the Network is killing millions of people each year with air pollutants when they could be manufacturing nose filters for six bucks a throw.”

“You lie,” she said. (156)

さらにリチャーズは自分が「ランニングマン」に出た理由を、これまで同様、「家族」のためであると説明する。

“Is she really your wife? That woman in the pictures?”

“Yes. Her name is Sheila. Our baby, Cathy, is a year and a half old. She had the flu. Maybe she’s better now. That’s how I got into this.”  
(173)

アメリカは、テレビで紹介されている妻シェイラの写真はネットワーク社に加工されたものだとは知られるのだが、それはすなわち、国が流す情報が信頼できないこと、その背景には、自分の知らない不平等な社会が存在することを示すものである。そして、最終的に彼女は、理不尽な状況に苦しみ、家族のために命を張るリチャーズを一人の「リアルな」人間として捉え、リチャーズの嘘を守り通すのである。これによりリチャーズは最終の敵に対峙する権利を得る。

リチャーズの最後の敵ダン・キリアンは、“I speak in a larger sense than the Games Authority; I speak in the national sense” (38) と述べるように、彼は番組制作のトップに位置するとともに、国家を代表する存在である。いわゆる全体主義的世界の「絶対的存在」、二つの世界（「持つ者」と「持たざる者」）の境界を守る「番人」であり、ベン・リチャーズの「神格化」を許可する権限をも持つ。実祭、リチャーズに「ランニングマン」として新たなIDを付与したのはキリアンであり、また、「ランニングマン」として最長記録を作り、ハンター長であるマッコーンに知力と気概で勝ったりリチャーズを仲間に取り入れるという「褒美」の許可を出すのもキリアンである。リチャーズは「最初の地点に戻る」(213) ことだけが最終目的であり、キリアンの甘言には乗せられない。しかし、キリアンは、最終の切り札としてリチャーズの家族の死を伝え、その繋がりを断ち切り、「下層階級のベン・リチャーズ



の死」を自らの手で執行しようとするのだった。

“Here’s the deal, Richards. Fly your plane to Harding. There will be a Games limo waiting at the airport. An execution will be performed – a fake. Then you join our team.” (215)

妻も子も残虐に殺されたことを知ったリチャーズは逡巡する。多くのヒーローがそうであるように、リチャーズは全てを投げ出せば手に入る永遠の「安寧」(225)の誘惑に心乱される。キリアンはリチャーズにとって「影」(Vogler, 65)であり、リチャーズが「受け入れられないもの」と同時に彼の「欲望」を映し出す存在なのだ。

しかし、最終的にリチャーズが選択したのは、自分に語り続ける「無意識」の声 “*The poor you will have with you always*” (224) に従って、「父」を殺害することであった。自己の命を犠牲にしてキリアンの死を成し遂げること、そして二つの世界を隔てる物的境界であるネットワーク社のビルを破壊すること、それは、いわゆる、国の情報を統制していたテレビ局を破壊し、テレビで作られていた仮想世界と、いわゆる国のトップである「父」の死による、リアルな世界の社会体制の破壊を志向するものとなる。この選択がリチャーズを真のヒーローにする。

#### 4. 帰還

ベン・リチャーズの「ランニングマン」として始まった「ヒーロー」の旅は、何をもたらしたのか。ヒーローは父との対峙によって「神格化」して戻ってくると同時に、以前とは異なる「力」「恩恵」を携える。リチャーズについても、キリアンとの対決をキャンベルの主張する「父との一体化」であると捉えるなら、リチャーズの場合は父殺しによる「正義の奪還」「不平等な社会の崩壊による新たな秩序の構築」を意味するものであるだろう。その役割は、“to slay the tenacious aspect of the father (dragon, tester, orgre king)

and release from its ban the vital energies that will heed the universe” (Campbell, 303) であり「世界救済のヒーロー」(Campbell, 299) の顔を持つ。しかし、彼が主役になるのではない。キャンベルが “The hero of yesterday becomes the tyrant of tomorrow, unless he crucifies *himself* today” (303) と示唆するように未来に託すものとなる。

現代は、「動物世界でもなく、植物世界でもなく、奇跡に満ちた世界でもなく、人間」の神秘が探求のテーマだとキャンベルが述べるように、人間はヒーローにもヴィランにもなり得る。地球を破壊し、環境に影響を与え、殺戮を繰り返し、移動によってウィルスを拡散し、生態系を崩壊、さらに地域の独自性を破壊するなど、様々な問題を引き起こしているのは、「人間」にすぎない。しかしそれらに対処できるのも人間なのだ。課題の一つひとつに向き合う時、私たちは、輝ける勝利にのみ目を向けるのではなく、その過程における苦境、そこで味わう絶望から学び進むことが求められている。それをヒーローの物語は私たちに伝えてくれる。

1970年代に書かれたベン・リチャーズの物語が伝える、リアルとバーチャルの曖昧性、現前化しにくい社会経済の格差、高度情報社会下で操られる人間の状況は、まさに現代が抱える問題でもある。再映画化によるヒーローの誕生が、私たちが立ち向かうべきものへの新たな示唆を得る機会を与えてくれることを願いたい。

## (註)

- <sup>1</sup> 本作からの引用は *The Running Man* (Hodder, 2022) であり、頁数のみを本文に示す。
- <sup>2</sup> これには、3日で書き上げたというものから、1週間、1ヶ月と諸説存在する。*The Art of Darkness*, 204, *The Complete Stephen King Universe*, 437, *On Writing*, 77, *The Stephen King Companion*, 148を参照。
- <sup>3</sup> キングとバックマンの作品比較については、ビールの分析が参考になるだろう。彼は作品の長さ（頁数）、登場人物の人物描写、作品の根底を流れるトーン（バックマン作品の根底は怒りであるという）、超自然現象の扱い方などについて、それぞれの違いを詳細に分析している。バックマンの初期作品については、超常現象は登場せず、「自分たちの身の回りに見られる現実世界」（Beal, 165）の問題がテーマであることを指摘する。
- <sup>4</sup> *The Running Man*, directed by Paul Michael Glaser, Tri-Star Pictures, 1987.
- <sup>5</sup> Beal, 164.
- <sup>6</sup> ヴォグラーのアンチ・ヒーローの詳細は以下の引用の通りである。“Simply stated, an Anti-hero is not the opposite of a Hero, but a specialized kind of Hero, one who may be an outlaw or a villain from the point of view of society, but with whom the audience is basically in sympathy.” (34)
- <sup>7</sup> ヒーローの旅の円環構造については、Campbell, 23, 27-28を参照。
- <sup>8</sup> マジストレールのインタビューで、キングはキャンベルの影響を受けたことを明かしている。*The Second Decade*, 3.
- <sup>9</sup> マジストレールについては *The Second Decade*, 48を参照。ビールも同様にバックマン作品における登場人物の “the lack of character development” を指摘しているが、その中でも『バトルランナー』のリチャーズについて、“Richards makes the most significant change” (165) と人間的变化を指摘している点は興味深い。キングのコメントについては *The Art of Darkness*, 204を参照。
- <sup>10</sup> キャンベルの「第一の門を突破する」越境については以下に引用を追記しておくたい。“[H]e comes to the “threshold guardian” at the entrance to the zone of magnified power. Such custodians bound the world in the four directions—also up and down—standing for the limits of the hero’s present sphere, or life horizon. Beyond them is darkness, the unknown, and danger... (Campbell, 64)
- <sup>11</sup> Vogler, 130. ヴォグラーは、西洋世界の神話では、ヒーローが超える境界がしばしば「川」で表されていることを指摘している。
- <sup>12</sup> *America’s Story Teller*, 64-65.
- <sup>13</sup> 以下の引用のように真っ暗闇の管を移動するリチャーズであるが、これはキャンベルの「クジラの胎内」（“The Belly of the Whale”）を象徴するものとも解釈できる。いわゆる母なる地球の「子宮」を象徴する暗闇からの脱出はヒーローを生まれ変わらせるものとなるという。実際に下水道を抜けた世界でリチャーズは新たな成長を遂げている。

The pipe was coated with slime, and he slid effortlessly about twelve feet to where the pipe elbow bent into a straight line. ... Then he was in the horizontal pipe – except for his head and arms, which were bent back at a joint-twisting angle. He wiggled the rest of the way in and then paused there, panting, his face streaked with slime and rat dropping, the skin of his lower back abraded and oozing blood. ...

Panting, he began to back into the unknown darkness of the pipe. (Underline added, 83–84)

#### (参考文献)

- Bachman, Richard. *The Running Man*. Hodder, 1982. 2022.
- Beahm, George W. *The Stephen King Companion : Forty Years of Fear from the Master of Horror*. Thomas Dunne Books, 2015.
- Beal, Kimberly. “Bachman’s “Found” Novels: *The Regulators*, *Blaze*, and Author Identity.” *Stephen King’s Contemporary Classics*, edited by Philip L. Shimpson and Patrick McAleer, Rowman & Littlefield, 2015, pp. 161–176.
- Campbell, Joseph. *The Hero with a Thousand Faces*. 3rd ed., New World Library, 2008.
- Dowling, Tim. “Can genre-buster Edgar Wright breathe new life into *The Running Man*?” *Guradian*, 19 Apr. 2024, [www.theguardian.com/film/2024/apr/19/edgar-wright-arnold-schwarzenegger-the-running-man-stephen-king](http://www.theguardian.com/film/2024/apr/19/edgar-wright-arnold-schwarzenegger-the-running-man-stephen-king).
- Foy, Joseph J. and Timothy M. Dale. “Broadcast Dystopia: Power and Violence in *the Running Man* and *the Long Walk*.” *Sthephen King and Philosophy*, edited by Jacob M. Held, Rowman & Littlefield, 2016, pp. 161–71.
- King, Stephen. *On Writing : A Memoir of the Craft*. Scribner, 2000.
- Magistrale, Tony. *Stephen King : America’s Storyteller*. Praeger, 2010.
- . *Stephen King: The Second Decade, Danse Macabre to the Dark Half*. Twayne Publishers, 1992.
- Vogler, Christopher. *The Writer’s Journey : Mythic Structure for Writers*. 3rd ed., M. Wiese Productions, 2007.
- Wiater, Stan et al. *The Complete Stephen King Universe: A Guide to the Worlds of Stephen King*. 1st ed., St. Martins’s Griffin, 2006.
- Winter, Douglas E. *Stephen King: The Art of Darkness*. Expanded and updated ed., New American Library, 1986.

#### (DVD)

*The Running Man*, directed by Paul Michael Glaser, Tri-Star Pictures, 1987.